P2-04

栄養士養成課程における教育方法授業の大福帳の分析
－食育指導案作成のプロセスに着目して－

Analysis of a Shuttle Card “Daifuku-cho” of Education Method Class in a Dietitian Training Course
- Focusing on the Process of Making Dietary Teaching Plans -

桑原 千幸*
Chiyuki KUWAHARA*
*京都文教短期大学
*Kyoto Bunkyo Junior College
Email: ckuwahara@po.kbu.ac.jp

あらまし：栄養士養成課程において食育授業の実践力を育成するため，食育授業の学習指導案を作成する授業をインストラクショナルデザインの理論に基づき設計，実践した．大福帳の記述内容のカテゴリ分析から，食育授業の対象者の理解，課題分析図の作成，授業の展開の組み立てに学習者が難しさを感じていることがわかった．一方で，授業の回が進むにつれて，学習者は学びの内容に楽しさを感じるようになり，指導案作成を着実に進めて自分なりの工夫をすることで自信を得て，最終的には指導案を完成させた満足感により食育授業を実際にやってみたいと考えるようになる様子がみられた．

キーワード：栄養士教育，インストラクショナルデザイン，授業設計，大福帳，ARCS モデル

1. はじめに

栄養士は企業，社会福祉施設，保育園・こども園・幼稚園，学校，職場などで集団給食の献立作成や調理，栄養管理を行う専門職である．2005 年に食育基本法が制定され，栄養士には学校や保育所等における食育の推進や普及のために，教育に関する知識・技術を身につけることも求められるようになった．「管理栄養士・栄養士養成のための栄養学教育モデル・コア・カリキュラム」(1)においても，「栄養指導の多様な場における対象者のライフステージや身体・精神的状況，価値観，社会的背景等の特徴を理解し」，さまざまな場において栄養指導を実践できることが学修目標とされている．

そこで，栄養士養成施設である短期大学において，食育授業の設計・実践力を身につけることを目的として，教育方法に関わる授業を設計した．しかしながら，栄養士養成課程の学生は栄養指導や栄養教育については学習しているものの，教育に関して体系的に学ぶ機会が少ないため，食育授業の実践計画を作成するという課題においては困難が予想される．本稿では，栄養士をめざす学生が食育の授業設計を学ぶ科目において，どこに難しさを感じているかを検討することを目的として，授業実践において教員と学生の間で用いられるコミュニケーションツールである大福帳の記述内容をもとに検討する．

2. 方法

2.1 対象

私立短期大学において，2019 年度後期に 1 年次選択科目として開講された「食育方法論」の受講者 30 名を対象とした．同科目は栄養士養成課程の発展的な学習内容として配置され，独自資格「食育実践スペシャリスト」取得のための必修科目である．

2.2 授業実践の概要

食育活動の効果・効率・魅力を高め，よりよい食育を実現するための教育的手法とメディアの活用について学び，分析・設計・開発・実施・評価という一連の食育設計プロセスを通じて食育実践力を身につけることを目的とし，稲垣・鈴木(2)を参考にして授業を設計した．授業の流れを表 1 に示す．

全 8 回の授業を通じて，教授設計のプロセスに基づいて食育実践計画書を作成できるようになることが主たる学習目標である．学習者は，対象とする学習者とテーマを自由に設定し，1 回 30～60 分程度の食育授業の学習指導案に相当する食育実践計画書を作成する．

表 1 「食育方法論」授業概要

回	タイトル	概要
1	オリエンテーション～「教える」ということ	食育授業のテーマを検討
2	食育授業の構想 ～学習目標を明確にする	食育企画書の作成
3	何を教えるのか ～課題分析	課題分析図の作成
4	どのように教えるのか(1)～食育活動の内容と展開	食育活動の展開を記述
5	食育授業の例から学ぶ （オンデマンド）	模擬授業のビデオを視聴
6	どのように教えるのか(2)～食育計画における指導と評価	食育活動の指導方法を記述
7	食育活動の実践～指導者の役割と学習意欲	食育指導案の完成
8	食育活動の実践と評価～食育計画書の形成的評価	相互評価をもとに食育指導案を改善

2.3 大福帳の活用

大福帳は向後[3]のフォーマットを参考に作成し，初回の授業開始時に使用目的を説明した．毎回の授業の最後に 5～10 分ほどの時間をとり，授業の感想，質問，要望，雑談などを記述するよう指示した．担当教員が全員の大福帳にフィードバックを行い，次回の授業開始時に返却するとともに，代表的な意見や質問を取り上げて全体に対して解説を行った．オンデマンド授業である第 5 回を除く 7 回の授業において実施し，受講者 30 名全員から回収した．

2.4 分析方法

大福帳の各回の記述内容について，向後[3]の分類を参考に，「意見・感想」「学習内容のまとめ」「質問」「改善要望」「その他」に分けてカテゴリ分析を行った．「意見・感想」については，学習者がどこに困難を感じ，どのように学習を進めているかを明らかにするため，「難しさ」「今後の計画」のサブカテゴリを設けた．さらに，本実践の学習環境や学習者の特性等について，学習意欲に関するシステムモデルである ARCS モデル[4]の枠組みで記述的に分析するために，「興味・関心」「やりがい」「自信」「満足感」のサブカテゴリも設けた．

3. 結果

大福帳の記述内容のカテゴリ分析の結果を表 2 に示す．全体として，質問／その他に関する記述は少なく，要望は 0 件であった．第 2 回までは学習内容のまとめに関する記述が多いが，第 2 回以降は授業内で取り組む課題に関する意見・感想が多かった．

3.1 食育授業設計のどこに難しさを感じているか

学習内容の難しさに関する記述は，第 2 回～第 4 回において特に顕著であった．個別の記述内容を検討すると，第 2 回は食育授業の対象（学習者）に合わせたテーマと学習目標設定の難しさに関する記述が 11 件，学習成果の分類を考慮した学習目標の設定に関する記述が 6 件みられた．対象とする学習者はさまざまであるが，特に幼児や小学生の発達や理解度に関する知識不足によって困難を感じている様子がみられた．第 3 回では，学習目標に応じた課題分析図の作成の難しさに関する記述が 14 件と最も多かった．対象者についての理解不足や，テーマに関する自身の知識不足に関する記述もみられた．第 4 回では，課題分析図をもとにした食育授業の展開の組み立てを難しいと捉える記述が 12 件あり，他には対象者に応じた指導方法に関する記述がみられた．第 6 回では学習目標に応じた評価方法と評価のタイミング，「指導上の留意点」に関する記述がみられた．第 7 回では全体の時間配分に関する記述がみられた．

このように，食育授業の指導案作成において，特に対象者の理解，課題分析図の作成，授業の展開の組み立てに難しさを感じていることがわかった．一方で，「今後の計画」に分類された箇所では，自身が気づいた困難や問題点にもとづき，次回授業までに見直し等の学習計画に関する記述が複数みられた．毎回の授業で指導案改善を繰り返すことにより，学習者は難しさを感じながらも，自分なりに工夫して解決しようとする姿勢を身につけていると思われる．

3.2 学習意欲の変化

ARCS モデルの観点から検討すると，回が進むにつれて，「自分が考えている食育が具体的になっているのが目で見てわかってきた」というように，学習者は学びの過程にやりがいや楽しさを感じるようになり，指導案作成を着実に進めることで自信を持ち，最終的には指導案を完成させた達成感を得て，食育授業をやってみたいと考えるようになる様子がみられた．今後は，初期段階から学習内容に興味・関心を持たせ，具体例の提示や成功の機会を積み重ねる方略により，学習の困難軽減を検討していきたい．

参考文献

(1) 日本栄養改善学会:“栄養士養成のための栄養学教育モデル・コア・カリキュラム”，http://jsnd.jp/img/H30_houkoku_5.pdf（2021.5.27 参照）
(2) 稲垣忠・鈴木克明:“授業設計マニュアル Ver.2: 教師のためのインストラクショナルデザイン”，北大路書房，京都（2015）
(3) 向後 千春：大福帳は授業の何を変えたか日本教育工学会研究報告集，JSET06-5，pp. 23-30（2006）
(4) 鈴木克明：“『魅力ある教材』設計・開発の枠組みについて―ARCS 動機づけモデルを中心に―”，教育メディア研究，Vol. 1，No. 1，pp. 50-61（1995）

表 2　大福帳記述内容のカテゴリ分析結果

		第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 6 回	第 7 回	第 8 回
意見・感想	難しさ	4	14	20	17	12	7	
	今後の計画	7	8	7	8	13	15	11
	興味・関心	4	1	1			1	1
	やりがい	5	6	10	14	10	6	6
	自信		3	4	10	13	12	4
	満足感		1			1	2	24
学習内容のまとめ		14	11	5	3	3	3	5
質問		1					1	
要望								
その他		5	1			2	1	3
計		40	45	47	52	54	52	54